
僕の彼女はあの...

marta

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の彼女はあの…

【Nコード】

N7659Y

【作者名】

m a r t a

【あらすじ】

いつも通りの生活を送る少年が美少女を助けたおかげでいろいろな事に巻き込まれていく…学園ラブストーリー

出会い。

今はいつも通り通学途中。
今日も学校だ。

僕は近頃、携帯小説といわれるモノにはまっている。

友達はバカにするが。
だから何だ？

彼女居ない歴〃17年〃年齢

ハマるのも仕方ないだろ。

こんな幼馴染がいたらな、とか、

運命の出会いとかないかなとかを思いながら
近頃過ごしている。

10分後に叶うとは知らずに。

ここは、学校の最寄駅。

いつも通り改札を出て学校へ向かう。

だが、今日はいつもの通学路とは少し違った。

僕が異変に気付いたのは30m先に見た目が「俺ら不良」と叫んでいる、集団を見つけたからだ。

はあー

絡まれなきゃいいや、と思いつつ素通りする事にした。
だが、よくみると、

真ん中にあいつらの友達とは思えない俗に言う美少女という女の子
がいた。

というよりも、囲まれていた。

「ちょっと、やめてよ。」

「いいじゃん、俺たちひまなんだよ」

まあ、僕には関係ない。

進路の変更はない。学校へ

だが、好奇心という欲に負けてチラッと見てしまった。

ヤバイ…目が合った

不良と？ 違う。

では…そう
美少女と。

目が合った

と、言うよりも見つめられた。

生まれつき、人の心を読むのに難がある僕であるが、彼女が僕に訴
えかけていた事はわかった。

助けて…だ。

僕にも良心と呼ばれるモノはある。

ここで助けに行く事も出来る。

だが、めんどくさい。

助けたからといってなんのメリットがあるだろうか？

彼女になつてくれるとでもいうのか？

期待するだけ無駄だ。

それに遅刻寸前だ。

今日だけカッコいい事もしてみるのはどうか？と、誰かが頭の中でささやいた。

そうだな。今日だけ。いつか報われる。そう信じて…

「おい。兄弟

いくらモテナイからって、

そこまでする事ないっしょ。は他から見て哀れみを感じるよ。」

自分でも

皮肉の才能あるなとつくづく思うよ。

「は？何だお前？てか誰？」不良A

「カンケーないのは、学校イキナ」不良B

「ボコらりたいの？」不良C

学校行った方がいいのは
お前らの方だろ（笑）

「もう一度言ってあげる。

理解できてなさそうだから、

あ・わ・れ…」

いい終わらないうちに不良Aが殴ってきた。

出た。大振り。

顔を横に傾ける。そして、足を掛け投げる。

あと2人。

今度はドロップキックときた。不良C

当たるギリギリまで耐える。

今だあのゲームで同じみ緊急回避というものをとった。

そして、Cの着地点には倒れてるAが…

どかつ A 戦闘不能。

友達思いじゃないCに軽くケリ。

C 戦闘不能。

ふう。あと1人。って

逃げてるし（笑）ま、いつか。

現在 8 時 27 分。 ヤバイ遅刻。

バックをとり学校へと方向転換して
走り出そうとしたとき

「あのーありがとうございます」ペーり。

あっそっか。いたもう一人。

たしかあの子は…

そっか。助けたんだっただ…

「本当に、ありがとうございます」

静かに振り返ると、そこには、茶色のロングヘアで長身のモデルみたいな子が立っていた。

よくみると、
本当にかわいい…
絡まれるわけだ。

「け、怪我はありませんか？」

「特に無いから、
心配しないで。それより急いであるから
気を付けて」

「ねえ、お礼したいんですけど…
メアドだけでも教えて」

「あー、本当にゴメン
学校行かなきゃいけないんだ」

そして、全力で学校へ走りだした。
なぜ聞かなかったって？
だって、今日で3日連続遅刻だからさ。
さすがにまずいだろ…

その日は最悪だった。

生徒指導室に呼ばれ、反省文をたっぷり書かされもうクタクタだ。

明日は、10分早く家出よ。

静かに決心した。

あー眠い

てか今何時？

8時？はっ？嘘だろーーーーーーーーーーーー

おい

タケル（目覚まし時計のなまえ）

何で起こさなかった？

あっ、電池切れてた。

ふう、間に合った。

今は朝日のHRだ。

「みんな着席し知ってると思うけど、今日から転校生が来るから。佐々木さん入って。」

「おい。転校生って知ってた？」

「先生、前言ってたじゃん。」

聞いてなかったの？女子らしいよ。」

今話かけたのは、前の席に座ってる一応親友って存在の田中。

「あつ、来たよ」

教室の男子からはコソコソ話声が

「やば、かわいくない？」

「マジだ」

女子は

「キヤーかわいいー」

など叫んでる。

前を見る。

そこには、何処かで見た事ある顔が…

「今日から、ここに入る佐々木結衣さんです。みんな、仲良くしてあげてね。じゃあ何かひと言。」

「んーと、佐々木結衣です。」

これからよろしくお願いします」

「「はい。」」

「じゃあ席は、あそこね。」

「はい。」

やっぱり何処かで見た事ある。

えっ、こっちに歩いて来る。

「よいしょっと」

転校生がとなりの席にちょこんと座った。

「これからよろしく。」

ニコツと微笑みながら言われた。

「あつ、はい。」

そして、口パクで

「キノウハアリガトウ」
と言った。

ああー————————

思い出したあー

昨日の子だ。

それから、あの子とは今日話さなかった。
一日中質問責めにあっていた。

そして校内では噂の美少女だ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7659y/>

僕の彼女はあの...

2011年11月23日20時48分発行